

# ゲージ理論の古典論と量子論

宮根 一樹

最終更新：2024 年 4 月 24 日

## 目次

1	はじめに	2
2	ゲージ理論の古典論	3
2.1	相対論的な場の理論とローレンツ群 . . . . .	3

## 1 はじめに

## 2 ゲージ理論の古典論

### 2.1 相対論的な場の理論とローレンツ群

相対論的な場の理論を構成するためには、ローレンツ変換に対して共変的な場を用意しておくとお見通しがよい。特に、ローレンツ群の代数の表現を調べておけば、そのような場を構成することができる。この節では、そういった観点から場の理論を構成する。

ローレンツ群とは、次のような内積

$$A^\mu B_\mu \equiv -A^0 B^0 + A^1 B^1 + A^2 B^2 + A^3 B^3 \quad (2.1)$$

を保存するような変換  $A^\mu \rightarrow \Lambda^\mu_{\nu} A^\nu$  のなす群のことであり、 $SO(3,1)$  と表すこととする。

## 参考文献

- [1] M. E. Peskin and D. V. Schroeder, *An Introduction to Quantum Field Theory*. Addison-Wesley Pub. Co, Reading, Mass, 1995.
- [2] 佐藤光, **群と物理**. 丸善出版, 東京, 2016.
- [3] 茂木勇・伊藤光弘, **復刊 微分幾何学とゲージ理論**. 共立出版, 復刊版 ed., 2001.